様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月　 １ 日現在

機関番号：２４３０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７９２５７８

研究課題名（和文）限界集落で暮らし続ける独居高齢者の強さとその意味

研究課題名（英文）Mental strength, like adaptability, vitality and sustaining among Elderly People Living Alone in Marginal Communities

研究代表者
村上　佳栄子（MURAKAMI, KAEKO）

京都府立医科大学・医学部・助教

研究者番号：３０５８４８６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,900,000円、（間接経費）　570,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、限界集落で暮らし続ける独居高齢者の強さとその意味ついて探究し、暮らしを持続する支援の方向性を検討していくことを目的とする。
限界集落の独居高齢者5名（平均年齢85歳）を対象に、半構成的インタビューを実施した。分析の結果、コミュニティと関連したプロセスの中で“生活の中で培ってきた適応力”，“自立と依存のバランス”，“生きるための健康観”，“地域でのつながり”，“支え継承したい故郷”，“最期までこの土地で暮らしたい思いと現実との葛藤”の心理的な強さを特徴付ける要因を形成していた。
心理的な強さは、限界集落での暮らしを持続可能とする力であり、生きる強みとして重要な示唆が得られた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to investigate the mental strength of elderly people living alone in marginal communities. The subjects of the study consisted of five elderly people living alone in marginal communities. The study was conducted in the form of a semi-structured interview survey. As a result, six core categories were found that related to Mental strength:adaptability as developed throughout their life, the balance between independence and dependence, how they view their health, relationships within the community, a hometown that they would like to support and hand down to the next generation and conflicts between their wish to live in their communities as long as they live and their conditions. These factors were formed within a process that is related to the community. Mental strength is essential for continuing to live in marginal communities. In addition, it was also suggested to be a strength for these subjects as they lead their lives.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域看護学

キーワード：限界集落　独居高齢者　心理的な強さ　コミュニティ

１．研究開始当初の背景

中山間地域を中心に過疎化、高齢化が急速に進行しており、それに伴い変わりゆく集落のあり方への対策・支援が、地方自治体に求められている。近年、日本の過疎地域では、地理的条件不利、農地の荒廃、人口減少、村行事や伝統の縮小など共通したコミュニティ課題が取りあげられている。徐々に地域の生活共同体の社会機能が衰退していくことで、住民の社会的な共同生活を維持していくことが困難な限界集落（65 歳以上人口が自治体総人口の過半数を占める状態）の問題に直面する集落が日本各地で顕著となっている。

本研究は、限界集落の独居高齢者が生活を持続する要因を探究することを目的とする。研究するにあたっては、先行研究である限界集落における独居高齢者の生と暮らしの持続可能性の探索（平成 22 年-平成 23 年：研究活動スタート支援）より得られた見解を基盤とした継続研究である。成果では、【地域で培ってきた人間関係】、【自然と共存する郷土への愛着】、【生活を支える精神的な強さ】、【健康への自負心】４つのカテゴリが抽出され、限界集落における生活を持続するために必要とされる住民の特性が明らかになった。対象者は、互いに支え合いながら築いてきた絆や人間関係を大切にしていた。また、地理的環境的な不利条件のリスクを抱えながらも郷土への愛着が根付いていた。さらに地域住民自身が主体的に地域問題に取り組み、強い精神力と生きがいを持っていた。そして対象者は、健康への自負心を持ちながら生活をしていたことが示唆された。対象者は、生きるための力を自ら身につけ、環境との相互作用するなかで限界集落での生活を持続可能としていたことが見出された。それと同時に、住民自身を心身ともに支え続ける要因は、心理面とコミュニティに焦点を当てることの重要性が示唆され、新たな見解として得ることができた。このことによって、今後、高齢者が住み慣れた限界集落で健やかに自分らしく生きるための在り方と支援に更なる成果の発展が期待できる。

２．研究の目的

本研究の目的は、限界集落で暮らし続ける独居高齢者の心理的な強さとはどのようなものであるかを明らかにし、心理的な強さとコミュニティとの関連性を探究することである。さらに、対象者自身が持つ心理的な強さの力への着目、ならびに、対象者とコミュニティとの相互の関連性に基づき、土地での暮らしを持続する支援の方向性を模索することを目的とする。

３．研究の方法

京都府北部の中山間地域における限界集落のｘ集落を対象とし、独居高齢者５名の女性を対象である。予備的調査として、行政職員に対象集落の現状や特性のヒアリングを行った。また、調査前に対象集落の地区踏査を展開し、人口動態や既存の報告書から関連情報を収集した。その後、行政職員を通して自治会長に調査依頼を行い、自治会長を通して対象者の紹介を得た。

インタビューの方法は、対象者に個別訪問を行いインタビューガイドに沿って半構成的インタビュー調査を実施した。インタビュー内容は、「地域での生活実態」「生活に関しての子どもなどの家族の考え」「生活での楽しみとすることと嬉しいこと」「生活での不安なこととしんどいこと」「地域で生活するために必要なこと」「地域での生活が難しくなったときの方向性」などである。対象者の了解を得て録音し、研究者はインタビューの状況を記録した。インタビューに要した時間は１時間半程度である。

研究対象者には、口頭と文書で研究の目的や方法を説明し、研究参加は任意であること、インタビューは、対象者の意思で途中いつでも協力を中止することができることを説明

した。また、プライバシーは保護され、得られた情報に関しては調査した情報は確実に破棄し、本研究以外の目的で使用しないことを説明した。これらに関する内容は調査前に対象者に説明を行い、書面による同意を得た。インタビューは、対象者の同意を得て、IC レコーダーで録音を行った。

本研究は、研究倫理審査委員会の承認を経て実施した。

分析方法は、Grounded Theory Approach を用いて分析をした。すべてのインタビュー内容を逐語化し、意味ある文脈毎に区切り、文脈単位の文節にラベル名を付けた。さらにラベル名を抽象化し、サブカテゴリ・カテゴリ・大カテゴリと段階を経ながら統合を進め、中核カテゴリを抽出した。中核カテゴリを抽出し、カテゴリ間の関係性について再検討した。すべてのカテゴリにおける構造とプロセスを明らかにし、カテゴリ関連図及びストーリーラインを検討した。

カテゴリ抽出・概念名の妥当性にあたっては、主観的な要素に偏らないようにするため、質的研究者と分析結果における概念名の表現・枠組みの適切性・真実性の再検討を積み重ねた。

４．研究成果

対象者は、平均年齢 85 歳の男女 5 名で、平均独居年数は、17．6 年である。限界集落で暮らし続ける独居高齢者の心理的な強さとコミュニティの関連要因について以下のことが明らかとなった。

Grounded Theory Approach による分析から、16 のカテゴリに依拠する以下の 6 つの大カテゴリが見出された。すなわち【生活の中で培ってきた適応力】、【自立と依存のバランス】、【生きるための健康観】、【地域でのつながり】、【支え継承したい故郷】、【最期までこの土地で暮らしたい思いと現実との葛藤】の 6 つの大カテゴリである。

生活の中で培ってきた適応力の大カテゴリは、“人生や土地における苦労”と“努力や支援で得られた安心感”の２つのカテゴリで構成されている。

自立と依存のバランスの大カテゴリは、“子どもの支援のあり方”と“自立を重視した生き方”の２つのカテゴリで構成されている。

生きるための健康観の大カテゴリは、“身近な死と生への思い”、“健康における予防・対策・維持”、“健康への心配と不安”、“生きていく支え”の４つのカテゴリで構成されている。

地域でのつながりの大カテゴリは、“土地でのつながり”、“過去から引き継がれたつながり”、“自己を通してのつながり”の３つのカテゴリで構成されている。

支え継承したい故郷の大カテゴリは、“後世に引き継ぎたい故郷”、“地域全体を支えたい思い”、“後世への思い”の３つのカテゴリで構成されている。

最期までこの土地で暮らしたい思いと現実との葛藤の大カテゴリは、“最期までこの土地で暮らしたい思い”、“土地を離れる選択肢”の２つのカテゴリで構成されている。

この６つの大カテゴリは、独居高齢者が限界集落で暮らすなかでの心理的な強さである特徴を示すものであると考えられる。

また心理的な強さは、コミュニティと関連しながら{生活の中で培ってきた心理的な強さ}、{地域でのつながりの中で培ってきた心理的な強さ}、{世代継承となる心理的な強さ}を経るプロセスの中で形成されていた。コミュニティで形成された心理的な強さの過程の中には、“コミュニティへの対象者の思い”が潜んでいた。この思いは、老年期における世代継承性の表れであり、対象者とコミュニティと心理的な強さの密接な関連を示唆するものである。最期までこの土地で暮らし続けるための検討は、対象者が、形成されてきた心理的な強さを生かし自分らしく

生きていくための支援につながる。

今後、老化や疾病を受容し、土地を離れざるを得なくなったとしても今保持している心理的な強さを持続する環境や支援が重要となる。またこの土地で培ってきた心理的な強さは、この土地で暮らし続けるための生活力、適応力、持続力でもあると同時に、生きていく支えとなる強みであり、必要とされる力である。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計　１件）

村上佳栄子、星野明子、大西早百合、桂敏樹
日本公衆衛生学会　2013　60 巻　第 10 号
p415

６．研究組織

(1)研究代表者

村上佳栄子　（MURAKAMI Kaeko）
研究者番号：30584867